～津田梅子の生き方（8）～伊藤博文との出会い～

鹿鳴館時代の梅子
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

帰国して 1 年が過ぎても未だ定まらない生活に悩んでいた梅子に、一つの転機が訪れます。そのきっかけとなったのは、1883（明治 16）年 11 月 3 日、天長節（明治天皇の誕生日）に井上外務卿の公邸で催された夜会でした。梅子は国費留学生としてその場に招かれていました。その夜会で梅子は、12 年前の岩倉使節団で同じ船に乗っていた伊藤博文と再会します。伊藤は、岩倉具視特命全権大使の下に 4 人いた副使の 1 人でした。夜会では、伊藤の方から「私のことを覚えておりませんか？」と梅子に尋ねたようです。話すうちに、伊藤は梅子が定職についていないことを知りました。この出会いがきっかけとなって、伊藤は自らの家族とともに住んでいた公邸に梅子をゲストとして迎え入れることと、自身の妻の通訳や娘の英語の指導を梅子に依頼することを思いつき、梅子の父・仙に連絡したのです。仕事もなく、退屈で気の晴れない毎日を過ごしていた梅子は、この申し出をすぐに引き受けました。

そもそも、梅子と伊藤が再会した頃の明治政府には、江戸時代末期に交わした不平等条約の改正という悲願がありました。対等な条約を結び直す価値がある文明国であることを示すために、西洋風の近代化を図っていくことで、様々なものが姿を変えていく時代でした。そんな時代のうねりの中で、日本の文明の高さを証明するべく、西洋の要人と社交する建物として、1883（明治 16）年 11 月 28 日、鹿鳴館は開館しました。開館直後の 12 月には、大山巌と捨松夫妻の盛大な結婚披露宴も行われています。鹿鳴館では連日舞踏会が繰り広げられ、多くの議論を巻き起こしながらも、一時代を担いました。そのため、この 1883（明治 16）年から 4 年あまりの時期は、「鹿鳴館時代」と呼ばれています。そんな時代背景の中で、洋風に身を包んだ捨松は大山夫人として活躍し、「鹿鳴館の華」と賞賛されました。一方、エスコート役が父・仙であった梅子は、このような場にはあまりなじめなかったようです。

さて、伊藤家で住み込みの家庭教師を務めることが決まった梅子でしたが、伊藤は梅子を「使用人」としてではなく、ゲストとして迎えた点が重要でした。伊藤は、梅子が自らの妻子に教えるだけでなく、梅子自身が多くを学べる機会にして欲しいと願っていたのです。伊藤は後に初代総理大臣にもなった人物ですから、当然そこでは、梅子が普段出会うことができないような高い階層の人々の往来や、外国人への応対の機会も多くありました。すっかり「アメリカ人」になっていた梅子が、日本語や日本の礼儀を修得する良い場になるだろう、とも伊藤は考えていたようです。梅子が伊藤家に滞在していたのは翌 1884（明治 17）年 6 月までで、およそ半年ほどの短い時間でした。しかし梅子にとって伊藤家での 6 ヶ月は、忙しかったけれど興味深い事柄にあふれた刺激的な体験でした。

伊藤博文
1883（明治 16）年 5 月ロシア皇帝即位祝典参列の直前
【提供】山口県光市伊藤公資料館

また、この頃梅子は伊藤を介して重要な人物と出会います。歌人で教育者である下田歌子です。下田歌子は、17歳で宮中に召し出されると、7 年余り女官として宮中に奉仕する生活を送った後、1879（明治 12）年に退官し、下田猛雄と結婚して家庭に入りました。ところが、結婚するとまもなく夫の猛雄が発病し、歌子は新婚早々から丸 4 年間、夫の看病に明け暮れる生活を送らなければなりませんでした。当時政府の高官であった伊藤は、宮中を出入りする間に自然と才女・下田歌子のことを知るようになっていました。伊藤は「歌子ほどの女性をこのまま狭い家庭に埋めておくのはもったいない」と考えて、歌子に女子のための塾を開くように話を持ちかけたのでした。歌子もその期待に報いるため、女子のための塾を開く決意を決め、1882（明治 15）年に自ら麹町一番町の屋敷に開いたのが、「桃夭女塾」です。梅子は伊藤の取り計らいで、その歌子に英語を教えるとともに、反対に歌子から国語・習字などを習ったのです。さらには歌子が主宰する桃夭女塾で教える仕事も与えられました。しかしこの仕事はフルタイムの仕事とまでは言えず、梅子は官費留学生であった自分を政府が登用する日を待っていました。

帰国からほぼ 3 年が経とうとしていた 1885（明治 18）年 9 月に、梅子は、華族女学校に教授補として採用されました。ようやく専任のフルタイムの仕事に就くことができたのです。分かりやすく現代の言葉で言えば、正規雇用されたことになります。華族女学校は、当時、宮内省所管の官立、つまり国立の学校でした。実は伊藤が準備委員会を立ち上げ、中心となって創立したのがこの華族女学校だったのです。

この華族女学校の設立にあたり、捨松も伊藤に招かれて準備委員に加わっていました。捨松や梅子にとって、華族女学校での女子教育の実践は、抱いていた夢がいよいよ実現する瞬間のように思えました。

参考文献：高橋裕子『津田梅子―女子教育を拓く』　岩波ジュニア新書　2022 年　230 頁
山崎孝子『津田梅子』吉川弘文館　日本歴史学会編集　1988 年　336 頁